

新年度スタート!

田中研新聞

第9号

2014年
5月1日発行

2014年5月1日号
甲南大学知能情報学部田中雅博研究室 毎月発行
http://canonion.is.konan-u.ac.jp
編集長：大畔 裕 (M2)
編集委員：吉岡一樹 (M1)・宮尾翔太 (B4)

平成26年度がスタートしました。今年度の田中研は、田中教授と、修士2年が3名、1年が1名、学部4年生が6名でのスタートとなりました。秋に3回生を迎えるまではこの体制でいくことになると思います。修士課程1年の1名を除き、学生は全員進路決定が必要な年です。既に内定をもらっている人もありますが、場合によつては、1年間がらぶっても結果が出ないこともあります。自分が本当にやりたいことは何かという自分

の意思の部分と、他人から見たときに自分の価値は何かという部分がマッチしないと、結果は出ません。マッチするところは必ずあるのですが、自己評価が正しくできていなくて、希望するところが自分の価値を發揮できるところではないときに、失敗することになります。その場合、対処方法は2つ。1つは志望を変え、自分を受け入れてくれるところを探すことです。もう1つは、自分を変えて、あくまでも初心を貫徹する

ということですね。後者のためには、自己改造が必要で、これには時間がかかるので、学部生向けのゼミの中で、そうしたことに意識を持つように指導してはいますが、なかなか自分を変えられることができない人があります。そういう人は、自分を見つめ直すことが必要です。

さて、私は2年間の図書館長の役職を終えると同時に、今年度から学部長という新たな役職に就きました。学部全体に責任ある仕事



4月9日にウィンドウズXPが長期にわたるサポートを終了した。アナウンスは以前から行われていたが、コンピュータへの関心が薄い人達のあいだではあまり認知されていなかったようで、中には困惑した人もいた。我が家では、私のは3年ほど前に、家族用は昨年ウィンドウズ7に切り替えたので、今回の騒動は割と他人事として捉えていた。普段家で使われているPCは7が数台とビスタが1台、あと8が1台・・・。

ネットブックの再利用
XPからLinuxに

のマシンへのLinuxのインストールを紹介しているウェブサイトに多数見つかった。Linuxには我々がプログラミング実習で使ったVine Linuxのほかに、UbuntuやCentOS、ほかにも数多くのディストリビューションが存在する。私は初めて自作パソコンを組んだときに費用を抑えるために一時的にUbuntuをインストールしていたことがあり、その後も余ったマシンにインストールしたり、仮想ドライブに入れて、遊ぶことはあった。だが、最近のUbuntuは動作が重く、シングルコアのAtomではとても快適に動かさそうだと思えなかった。選択肢としてはナシである。そこで目をつけたのが、Ubuntuの派生のOSだ。派生の主な違いはデスクトップ環境であり、Ubuntuはデスクトップ環境にUnityが使われているが、その代わりにXfceを使用しているXubuntu、LXDEを使用しているLubuntu、KDEを使用しているKubuntuなどがある。中でもXubuntuとLubuntuは軽量であり、ネットブック

論文検索について
図書館ガイダンスを開催

ゼミでは毎年、図書館から4回生に向けてガイダンスをしております。私自身はこれで3回目なので、内容を理解しているが、4回生の時には知らない部分も多かった。のちに類似論文を探すなど、有意義な時間になったと思っている。図書館では、論文の複写などは置いていないので、学部生にとっては先生の助けなしではお目当ての論文を探すのはインターネットを使わなければ非常に困難であり、先生に相談して

さて、今回はネットブックを再利用する手段としてXubuntuをインストールしたが、このネットブックを継続的に使うことはおそろくないだろうか。というのも、今までUbuntuをインストールしたときも、知的好奇心から普段使わないOSを使ってみたという理由がほとんどで、一通り弄って満足して放置するのは毎度のことである。今回も実験台として活用したにすぎない。ウィンドウズのソフトと互換が利くといっても、やはり不便なことも多いし、それを含めて楽しめるくらいでないと、ウィンドウズの代わりとしての積極的な活用は難しいのではだろうか。しかし多くのLinuxは無料で公開されているので気軽に試すことができる。使わなくなった古いパソコンに入れて遊んでみたら、中にはハマる人もいられるかもしれない。「入れた方がいいがウィンドウズに戻せないじゃないか!」等の苦情は受け付けられないので、自己責任でお願いします。(大畔裕)



二輪の免許を取得中

就活で見つけた新しい趣味

今年の年始から就活に全力投球し、なんとか早い時期に終わらせることができたので、普通自動車二輪の免許を取ることにした。きっかけは、とある自動車&バイク部品メーカーの企業説明会に行ったときの先輩社員懇談会。社員も学生もみんなバイクの知識が豊富で話についていくことができず、悔しい思いをした。だが一方で、バイクに関して楽しそうに話す彼らを見て、自分も乗って快感を味わってみたいと思った。バイクは知識があれば自分で整備することができる。パソコンを組み立てたり分解したりするのが好きなので、自分の手で弄り直すことにハマりそうだというのも理由だ。



4月1日に企業から内定の連絡をもらい、20日に基本情報技術者試験があったので、21日に教習所に入校した。教習所に通うのは学生のうちでないとい時間的な制約があるし、時期が遅くなると学会発表の準備や修論などに影響する可能性もある。できる限り早く免許を取得したいところである。

400SFというモデルなのだが、この車体は約200kgある。停車しているあいだはこの巨体が倒れないように両足で支えないといけないから大変だ。一定以上傾くと支えきれなくなり、そのまま倒れてしまう。倒れたら倒れたでここから大変で、自分で起こさなければならぬのだが、普通に持ち上げようとしても全然持ち上がらないので、コツが必要になってくる。説明は受けるが中途半端な理解で行くと、私のように腰を痛めることになるので要注意だ(治るのに4日程かかった)。ユーチューブでわかりやすい解説の動画を見つけたので、2回目の

教習では腰に負担をかけずに起こせるようになった。この重量なので、走行中にバランスを取るのも大変だし、そのうえMT車なのでギアチェンジもしなければならぬ。両手両足で違う作業をしなければならぬので、操作がモタついたり誤ることもしょっちゅうだ。コースが狭いので2速から3速に上げたらずぐブレーキを掛けなければならぬのだが、3速に上げたことに満足して壁に突っ込みそうになったりもした。体で覚えるまでの辛抱なのだろうが、どうも公道で走る未来が見えない。自動車の教習を受けていたときも初めはギアチェンジでモタ

初回の教習ではバイクに跨るまでの動作や操作の仕方など基礎的なことから教わった。しかし基礎とはいえず、これがまた難しい。教習で使用しているバイクは、普通自動車二輪免許で運転できる中で最大の400ccであるホンダのCB

私が初めて外国に行ったのは、昭和49年、高校3年の夏休みである。シドニー大学物理学財団が国際交流イベントとして、外国の高校生3年生を招待し、国際科学学校というのを開いている(今も続いている)。

わたしの訪れた町

第1回 シドニー

日本はあまり旅行をしていない方ではない。この年になって、まだ行ったことがない県単なる通過は除くが東・北日本を中心にかなりある。しかし、職業柄、外国は結構行っているほうだ。そこで、外国の町を中心に、私の印象に残っている点を挙げ、読者の皆さんにもお勧めできればと思いい、これから連載してみようと思う。外国の町といえば、ウイーンに1年半住んでいたの、他の町とは思えないレベルが異なる。これは後に置いておいて、訪問したところのある町をランダムに挙げていこうと思う。

私が初めて外国に行ったのは、昭和49年、高校3年の夏休みである。シドニー大学物理学財団が国際交流イベントとして、外国の高校生3年生を招待し、国際科学学校というのを開いている(今も続いている)。

文部省(当時は文部科学省とは言わない)が各都道府県を通じて推薦された高校生を文部省に集め、英語の面接試験で5名を選び、私はその一員(奨学生)として派遣された。文部省の先生を含む6人が東京を発つてから2週間の間に西から地球を回り、イギリスの5人、アメリカの10人と合流し、ハワイを経由してシドニーに到着。その後2週間ホームステイをしながら国際科学学校に通い、最後に香港旅行がおまけに着いて日本に帰るという行程だった。当時、国際便は羽田空港だった。1ドル308円の固定相場制、1ポンドが800円だった。円が安いのは日本の輸出産業には良かったが、外国旅行はまだ高嶺の花だった。そういう時代に、招待で行かせてもらったのだから、ありがたい。噂では、我々5名には一人あたり200万円ほど掛かっているとのこと

ロボット実験室開設

より便利な研究環境に



今年度の4月から13号館2階にロボット実験室が新たに設置されました。昨年度まではロボットを屋内で行っていたため、ロボットで実験する環境が十分に整っておらず、廊下やそれらの研究室内で実験を行っていたため、ロボット実験する際に通行人などへの配慮せずに、実験が行えるようになりました。またロボット開発の研究室(田中研、和田研、梅谷研等)の学生は、セグウェイ等の移動台車ロボットを使って実験する際に先生の許可が省かれたことで、スムーズに実験が行える環境が整ったと言えるでしょう。

この実験室には「漫才ロボット」で有名な北村研、灘本研等が合同開発を行っている「アイちゃん」と「ゴン太」や、田中研、和田研、梅谷研等が合同開発を行っている「Koro」が収納されています。また私たちが開発を行っているKoroは、8月に行われるデモンストラティブコンテストに向けて現在開発中です。

こうした環境が整うことで、様々な先生方や学生などがロボットに触れる機会が増えるため、今後甲南大学のロボット開発は、より一層進化していき、より良いロボットが開発されるでしょう。(吉岡一樹)

研究室対外活動予定

- 5月23日 田中教授、システム制御情報学会で口頭発表
- 5月28日 野々口君、ロボティクス・メカトロニクス講演会2014 in Toyamaにてポスター発表

編集後記

こんな企業に入ってこんな仕事をしたというビジョンはあったのですが、人生はなかなかうまくいかないものなので、きつと夏あたりに関心したことのない企業の内々定が出るのだろうかと思っていました。しかし、3月初旬から受けていた、是非とも行きたいと思っていた某社の選考がトントン拍子に進み、そのまま内々定頂くことができました。自分が関わる製品が、将来世界中で使われるのだということを想像すると、今からワクワクが止まりません!

就職活動は、今後約40年活動するであろう居場所を決める人生の大イベントです。そのために自己分析や企業研究、いろいろな人と喋ったり文章を書いたり頑張りましたが、この努力が報われたのは、運もあつてのことだと思えます。

さて、気づいた方もいるかもしれませんが、今回から編集担当が2人増えました。と言っても今回は殆ど大胖が作っています。次回以降は少しずつ仕事をシフトしていきたいと思っておりますので、ご期待ください。(大胖裕)